

Title	<大會抄録>漢代皇帝支配の原理
Author(s)	好並, 隆司
Citation	東洋史研究 (1975), 34(3): 454-454
Issue Date	1975-12-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/153587
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

中央政界に樞要なポストを占めた官僚である。しかし米芾は晩年でこそ書畫學博士の稱號をもらったが、本來官吏としては失格者に近く、自らもその活動の場を翰墨の世界に限った。外に發しては天馬空を行くような型破りの奇行となったが、内に沈んでは、書の實作においてまた研究において、熱烈な古法の探求者でもあった。それ故にこそ、彼は中國における最初の最も藝術家らしい藝術家になることができたと考えられる。

政治や社會という窮屈なわけにはどうもはまりきれない所があるが、藝術を至上のものと考え、それを實踐することにおいて誰よりも純粹にかつ大膽になることのできた稀有の人物であった。これはおそらく彼以前には見ることでない新しいタイプの人間であり、ここに彼が近世の藝術史に占める大きな意義を見出すことができる。

米芾の祖先が西域「米國」からの歸化人であつたろうという説は、早く桑原隲藏博士によって唱えられた。米芾が生涯を通じて政治の表面に立たず、ひたすら翰墨の世界に身を沈めていったのも、そのような自己の出自に關する屈折した意識が、そのことをいさう促したのではなからうか。

今回の發表は、主として米芾の人と書を關連づけながら論じてみたい。また翁方綱の「米海岳年譜」の遺漏を補ったより詳しい年譜を當日配布する豫定である。

漢代皇帝支配の原理

好 並 隆 司

漢代における皇帝の人民支配にとつて、二十等爵制の占める意味の大きいことは既に西嶋定生氏によつて明らかにされている。その爵制は一面で、商鞅の軍功爵を繼承するものと考えられるから、この點を検討すると、知行制の面と官僚制の面とが、内在しており、漢初その矛盾が「功」の意味概念を擴大していった。そして後者の優位が明らかになるにつれ、基本的には田宅授與制は解消していく。しかしながら、爵に伴う田宅保有の考えは士大夫層の觀念に残り、吏民私有田の枠内の許容の原理となつたと思われる。前漢末、限田制の基準はおそらく爵制に伴うこの觀念の再現であらう。

右の報告趣旨を、漢代の徙陵邑による皇帝の齊民支配を介して説明するとともに、爵制的限田制が大凡如何なる標準をもつていたかを復原する作業の一端を明らかにしたい。

ブリヤートのラマ教

若 松 寛

ブリヤート族が帝制ロシア時代熱烈なラマ教徒であつたことは、我國でもよく知られているが、その實態については未だ十分に研究されていないようである。私はブリヤートのラマ教に關し、特にそ